

学会ニュース

目次

・ 第34回大会について	1
【エッセー】		
・ グラーツの国際18世紀学会、ドイツ語訳『歴史批評辞典』のことなど	笠原賢介	2
・ 「中隠」賛	高橋博巳	4
・ 事務局より	6

第34回大会について

来年度の第34回大会は、2012年6月23日（土）、24日（日）に名古屋大学で開かれる予定です。開催校責任者は長尾伸一さんです。

共通論題は「18世紀と災厄（天災）」（仮題）で、24日（日）を充てる予定です。

詳細は大会プログラムでお知らせいたします。（4月頃にお届けする予定です。）

自由論題公募要領

第34回大会で発表を希望される会員は、1000字以内の発表要旨をつけて、3月9日（金）までに学会事務局まで郵便かメールでお申し込みください。郵送の場合は要旨のプリントアウト原稿および電子ファイル（「ワード」形式で作成されたもの）の両方をお送りください。メールの場合は、要旨を添付ファイル（「ワード」形式）またはメール本文にコピーしてお送りください。

発表は1件につき50分、うち報告が40分、質疑応答が10分の予定ですが、申込者が多数の場合は、個々の発表の時間を短縮したり、あるいはこれまでの発表の有無、共通論題を含む諸分野のバランスなどを勘案して、幹事会で調整ないし選考させていただくこともありますので、この点はあらかじめご了承くださいませようお願い申し上げます。また、会場で配布されるコピー資料は原則としてご自分でご用意いただくことになっています。

詳細はプログラムが決定され次第、事務局から個々に連絡申し上げます。

エッセー

グラーツの国際18世紀学会、ドイツ語訳『歴史批評辞典』のことなど

笠原賢介（法政大学）

現在、ヨーロッパ18世紀の思想家が非ヨーロッパ世界をどのように捉えていたのかという問題に関心を持っている。この問題については、中川久定会員がシュローバハ氏と編んだ『十八世紀における他者のイメージ アジアの側から、そしてヨーロッパの側から』（河合文化教育研究所、2006年）において、本会会員諸氏が関わる形で研究の端緒が置かれている。同書においては、「その時代には克服不可能と思われていた多くの障害にもかかわらず、他者を理解しよう、そして他者と交流しようという、東西に共通の意志が存在していた」（同書「フランス語版への序文」）ことが、多角的な論考によって明らかにされている。私としては、このような試みも手掛かりとしながら、ドイツ語圏の思想家、レッシングとヘルダーに取り組んでいるところである。ただ、私の場合は「他者のイメージ」というよりも、他者理解の問題をどのように作品化しているのか（レッシング）、他者理解の手立てをどのように提示しているのか（ヘルダー）ということが関心の中心である。

先の書物に対する故岩尾龍太郎会員の書評（『日本18世紀学会年報』第23号）が指摘するように、この種の考察が、現在の世界のあり方から見た場合に楽天的にすぎる「相互交流の賛歌」とどまってしまう可能性もあろう。だが、他者理解の「意志」を放棄するわけにはゆかない。また、18世紀を生きた人々のすべてが、そのような「意志」を持っていたわけでもないのである。

このような関心を持ちながら、7月25日から29日にかけてオーストリアのグラーツで開かれた国際18世紀学会第13回大会に参加した。グラーツは、ハンガリーとスロヴェニアの国境まで約50kmの所にある古都で、かつては対オスマン・トルコの砦でもあったという。そのような地理的位置もあって大会では、東欧関係の発表が多く見られた。5日間にわたって繰り広げられた膨大な発表の内容を概観することは私の任ではない。東欧関係の発表についても、そのすべてのセッションに参加したわけではない。そのような限定の上であるが、ハプスブルクとオスマン帝国の間で揺れた諸地域に西欧の啓蒙が与えたインパクトとリアクションについて、東欧諸国からの研究者によって直接の知見を得ることができたのは幸いであった。その他、私の知る範囲でのことであるが、議論は、ヨーロッパ的なアイデンティティーの源泉としての18世紀、そのような源泉が生み出したテキストの現代的意義・読みの可能性、汎ヨーロッパ的思考と地域的・文化的アイデンティティーとの相克・和合、等々をめぐっていたというのが感想である。オリエントなどヨーロッパに隣接する地域における18世紀、そこからの声、そこから見てのヨーロッパ——これらを踏まえた「相互交流」の主題化は、残念ながら、少なかつたと言わざるを得ない。だが、18世紀の東アジアとヨーロッパを比較検討するセッションが長尾伸一会員によって開かれたことも付言しておかなければならない。このような方向がより大きなものとなることを願わずにはいられない。

なお、異郷の地ということもあって緊張した空気のなか、参加した会員諸氏と短いながらも密度の濃い一時を過ごし、さまざまな貴重な示唆をいただいたことを、感謝しつつ、記しておきたい。

グラーツから転じて、独訳『歴史批評辞典』に話しを移したい。

1741年から44年にかけてベール『歴史批評辞典』の独訳がライプツィヒで出版された。これは、18世紀ドイツにベールの思想が影響を与えるに当たって大きな役割を果たした翻訳である。表紙にはゴットシェートの名前が記してあり、彼の訳として知られているが、彼の行なったのはベールにはない注解の付加や序文の執筆であり、訳文の多く、また出版へのイニシアティヴはケーニヒスレーヴ（1684～1754年）という今日まったく忘れられてしまった一人の法律家によるものである。

訳文は、管見の限りでは、原文にない注解ないし注解的文章の挿入が時にみられるものの多くはな

く、正確である。注解の挿入をベールの懐疑の刃を受け止められなかったドイツの後進性の証しとすることもあるがそうであろうか。「マニ教徒」の項には、摂理に対する懐疑が示された一節に対して、『弁神論』からの数節が「ライプニッツの解答」と題して挿入されている。この挿入によって、ベールが提起した問題が他にもないその箇所にある、ということが際立たされる結果となっている。人々は独訳の『辞典』によってベールの懐疑の要点を知り、思考を巡らしたであろうことが推測されるのである。

膨大な『辞典』を翻訳する情熱の背景には、17世紀末からのライプツィヒ大学の学者たちによるベール受容およびベールその人との交流がある。また、この翻訳は、レッシング、ヴィンケルマン、ヘルダーなど18世紀ドイツの思想家に大きな影響を与えてゆく。文学史でしばしば悪役にされるゴットシェートのイメージでもってこの訳業を片付けるならば誤りである。

『歴史批評辞典』には、野沢協氏による邦訳があることは言うまでもない。氏の膨大な抄訳と解説がなければ、独訳への関心を持続することは困難であったと言わざるを得ない。その上で考えて見たいのは、18世紀ドイツにおける『辞典』の影響の特性である。

見落とすことのできないのは、枝分かれしてゆく膨大な注釈が本文を圧倒しているという『辞典』のあり方である。ゲーテはこれを「迷宮」と名付けている（『詩と真実』）。若きレッシングはこの形式そのものを模倣している（「ソフォクレス論」）。『辞典』の項目の立て方は体系だったものではなく、本文と注釈にはさまざまな見解や引用が錯綜し、時に真意の所在が不明になる多義的な意味の場、文字どおりの「迷宮」が形成されている。

18世紀における事典といえば『百科全書』があり、グラーツの学会でも鷲見洋一会員をはじめ会員各氏による先端的な研究の発表がなされたところである。〈百科全書〉とは、知識が円環状の連鎖をなすことであるという（『百科全書』「百科全書」の項）。ここから見ると、『辞典』はそれに外れること甚だしいものと言わなければならない。だが、この点にこそ『百科全書』の先駆者に尽きない『辞典』の魅力があると思うのである。

野沢氏が述べるように、18世紀が進むにつれて『辞典』は啓蒙思想家たちの思想闘争の道具となり、並行して『辞典』を再編集した縮約版が編まれてゆく。フリードリヒ大王とダルジャンスによって1765年にベルリンで刊行されたのもこのような版であるが、ドイツでは、世紀半ばにライプツィヒで刊行された『辞典』全体のドイツ語訳の影響が顧慮されるべきである。興味深いのは、野沢氏が指摘する「考証学的研究、文芸、色々の言語、古代文化、美術などが人間精神が最初の数年と青春기에専念する事柄である。哲学は成年時代になってはじめて従事できる」という言葉である（『百科全書』「折衷主義」の項）。思想闘争の時代にもはやベールは時代遅れであるという主旨だが、ドイツでは「考証学的研究、文芸、色々の言語、古代文化、美術」が、歴史的・批判的要素や哲学的・神学的議論と一体となって受容されてゆく。これを〈遅れ〉と表現するならば妥当ではないであろう。

レッシングの父は学位論文のなかでベールを反駁したという。レッシングは1746年から48年にかけてライプツィヒ大学に学んでいる。彼は早い時期に、独訳であれ仏語原典であれ、ベールの作品に親しんでいたものと思われるのである。ベールはレッシングに生涯にわたる影響を及ぼすことになるが、十分に研究されているとは言い難い。原因はドイツにおける懐疑論の伝統の欠如にあると指摘したのはイギリスの研究者ニスベットである。

弱冠25才のレッシングが世に問うた作品に『カルダーヌス弁護』がある。これは、『辞典』の「カルダーノ」の項を「補足」して、このルネサンスの奇才の名誉回復を図ろうとしたものである。関心の中心にあるのは、カルダーノが行なった偶像崇拜、ユダヤ教、キリスト教、イスラームの比較論であり、晩年の『賢者ナータン』につながってゆく。レッシングは「考証学的研究」の才を発揮し、劇作家のセンスも織り交ぜながら、当時の辞書類によって歪曲されたカルダーノ像を覆してゆく。主題はユダヤ教、イスラームへと移り、レッシングは、ベールの寛容思想を引き継ぎながら、『辞典』の「マホメット」の項に色濃く見られるヨーロッパの伝統的なイスラーム像を転換する。言外に不在の

異教徒が暗示される。ベール、カルダーノ、当時の学者の文章、聖書が織り合わされ、宗教の真理性をめぐって謎をかける多義的な意味の場が形成されている。レッシングは短期間でこの作品を書いたであろう。Dichterとはこのような人を言うのかと感嘆する他ないのである。

ベールの非ヨーロッパ世界把握には問題が孕まれていよう。だが、「マホメット」の項の注 (A) にはブリアウッドからの引用として「地球上の既知の地域を三十等分すれば、キリスト教徒の地域は五、マホメット教徒の地域は六、異教徒の地域は十九となろう」という言葉が登場する。そのような地球ないし世界の住人としての感覚はベールからレッシングへ確実に引き継がれていると思うのである。

「中隠」賛

高橋博巳（金城学院大学）

田能村竹田が袖珍三代集を旅囊にしにのばせていたと知って、不肖チクデニアンのももしばらく古今集の文庫本を鞆に入れて持ち歩いていたが、しかし所詮猿まねは身につかないものでいつしかやめてしまった。ところが最近文庫の漢詩集が充実してきて、『柳宗元詩選』、『白楽天詩選』上下二巻が相次いで刊行されたので（岩波文庫）、これを鞆のなかに入れておけば、ちょっとした空き時間も苦にならず、むしろ楽しみの時間に早変わりする。

たとえば白楽天は何でもない（といっても政府高官で大詩人の）日常を平易な語を使って詩にした天才であるが、若いころ親しんでいた古文辞派からは読んではいけないブラックリストに挙げられていたので、これ幸いと怠惰にもその教えに従い、人生の終着駅が近づいた今頃になってやっと、

人老多病苦　　人老いて病苦多きも
我今幸無疾　　我は今 幸いに疾無し
（「狂言 諸姪に示す」下巻、325頁）

というような詩句に共感を覚えるようになった。ところで「18世紀学会ニュース」に中唐8、9世紀に生きた詩人の話を始めたのは（竹田を枕に振ったとはいえ）、毫碌してとうとう時代の区別もつかなくなったからではない。

宝暦-明和の交（1763-4）に朝鮮通信使の正使書記として来日し、浪華で出会った兼葭堂の風雅をソウルに伝えて、やがて北学派が形成されるきっかけをつくった成大中がじつは白楽天の「中隠」を実践していたからである。その成大中の存在に気付いたのはかなり昔のことになるが、当時は韓国の文人にアクセスする手立てもなく、日本にのこされた資料で垣間見ることしかできなかった。それが2003年国際18世紀学会UCLA大会のラウンドテーブルがきっかけで、韓国の鄭珉さんから帰国後、成大中の文集『青城集』と李彦瑱の『松穆館燼余稿』の複写を送っていただいたころから、歯車は徐々に動き出した。以前この学会ニュースで報告した日韓美学研究会で受けた学恩とともに忘れることができない。昨年もたまたま鄭さんの案内で訪れたソウルのブック・ミュージアムで、大中の蔵書印が捺された『易学啓蒙要解』の手沢本を目にして縁浅からぬものを（勝手に）感じた。

さて、大中は「寢居小記」で生涯を振り返って、先祖のおかげで科挙にも合格し、英明の君主・正祖（TVでは「イ・サン」）に認められて高級官僚の道を歩んできたことを記したあと、こう述べている。

今且^{まさ}に老いて白首たり。自ら平生を顧みるに、楽しみ多く、悴^{つか}るること少なし。食、甚だしくは乏しからず。官、甚だしくは卑からず。行、甚だしくは汚ならず。交、甚だしくは洗^{とく}ならず。遊、甚だしくは狭からず。隱、甚だしくは僻ならず。官に衣食すること、亦た四十年有余。約を以て泰と為し、退を以て進と為す。足らざるを以て余り有りと為す。幸いに大災無く、以て老に至る。

これはまたなんと幸せな人生であろう。老いて白髪頭になったいまも、「楽しみ多く、悴^{つか}るること少なし」というのが、いささか人生に疲れた私などからみると羨ましい。しかもこの思いは「足るを知る」思想に裏打ちされて確乎としたものである。「食・官・行・交・遊・隱」と列挙されたどれをとっても理想的で、それが「甚だしくは…でない」という部分否定によって悠揚迫らぬ余裕さえ感じさせられるのも心憎い。千利休の「家はもらぬほど、食事は飢えぬほど」（『南方録』）という名文句を思い出される方もおられよう。さかのぼれば孔子が「君子は食飽かんことを求むること無く、居安からんことを求むること無し」（『論語』学而篇）と云って以来の原則である。そして今や「詩文」だけを楽しみに生きていると云って、次の文章が続く。

強いて且つ自ら戯れて曰く、吾れ老聃^{らうたん}より貴く、陶潛より富み、白樂天より寿^{いのち}ながし。太平に生きて老ゆるは、杜子美に勝り、君恩に終始するは、李太白に勝る。分に於いて已に過ぎざらんや。
(『青城集』七)

老子・陶淵明・白樂天（樂天が没したのは数え年75歳に対し、大中は77歳）・杜甫・李白、いずれも中国文学の巨星である。彼らを向こうに回して、それぞれ遜色がないのはいかにも「過分」と言わなければならない。

どれほど恵まれていたかは、「白樂天の中隱詩に和す」によって知られる。

我雖居城市	我れ城市に居すと雖も
何異在山樊	何ぞ山樊 ^{さんぼん} に在るに異ならんや
室有詩書娛	室に詩書の楽しみ有り
門無車馬喧	門に車馬の喧 ^{かまびす} しき無し（中略）
官俸亦不薄	官俸も亦た薄からず
歳用四千錢	歳用 四千錢
公庭豁数畝	公庭 豁 ^{ひろ} きこと数畝
怪石对南山	怪石 南山に対す
賓朋幸不棄	賓朋 幸いに棄てず
雅集敵西園	雅集 西園に敵す

(同上、三)

ソウル市中の官邸にいても、そこには山中にいるのと変わらぬ静かな生活があり、「詩書の楽しみ」

を妨げる野暮な訪問客もいない。この「車馬」には、楽天の「車馬の客の造次門前に到る無し」（「中隠」）はもちろん、陶淵明の「飲酒」以来の典拠がひかえているので、後の「南山」もソウルナムサンの南山であると同時に、陶詩の「悠然として南山を見る」が響き合っている。それに「官俸」も少なからず、年間支出は「四千銭」、加えて広い庭もある。「西園雅集」の参加者は、蘇軾・黄庭堅・秦觀ら宋代の錚々たる人々だったが、大中の催す詩会もそれに匹敵するというから豪儀である。その心意気やよし、やや遅れて田能村竹田もまた《西園雅集図》を描いて、「只今、我が政、彼よりも美なり。必ずや出でん、蘇黄一輩の人」と着賛しているのが想起される。大中も竹田もおしなべて18世紀の文人は、「蘇・黄」蘇軾・黄庭堅とも「一輩」すなわち同輩感覚だったようだ。

とするならば、大中が先の詩の続きに「一切の榮辱の憂い、曾て眼前に到らず。持して楽天の隠に比ぶれば、吾れ猶お其の全きを享くるがごとし」と記している条も真面目に受け取るべきであろう。大中は長寿だけでなく、「中隠」という点でも白楽天を超えたと思った、その思いが重要である。その原動力は白楽天の楽天主義だったのではなかろうか。河合氏によれば、楽天が謳い続けた幸福は「白楽天によって選り取られ、創り出された世界」（『白楽天』岩波新書、208頁）だったという。白詩を不滅にしているのがその精神だとすれば、大中もまたその姿勢から学んで、みずからの「幸福」を創り上げたのであろう。この生き方は現代人にも示唆するところ少なくないのではなかろうか。



事務局より

業績アンケートについて

『年報』に会員の業績を掲載するために、例年この時期にアンケートを行っています。同封の用紙の要領に従って、回答をお願いします。締め切りは2月末です。データの整理のため、早めにお返事いただければ幸いです。（3月刊行分は予定でもかまいません。また、次年度号に掲載していただくこともできます。）

学会サイトの移転について

当学会のサイトは現在、国立情報学研究所の学協会情報サービスを利用していますが、そのサービス自体が2011年3月末をもって終了することにもない、当学会のサイトも移転いたします。新しいサイトのアドレス等は追ってお知らせいたします。

国際18世紀学会の名簿について

すでにお知らせしたように、国際18世紀学会のサイトがヴォルテール財団からラヴアル大学に移り、名簿もそのサイト上で公開されています。（<http://www.isecs.org> → ISECS-direct ; フランス語版では Répertoire という項目です。そこから人名や国名に従って探せます。）

個人情報も公開されているので、訂正の必要がある場合、あるいは個人情報の公開を望まない場合

は、ご自分で訂正していただくか、管理責任者 (Pascal Bastien. admin@isecs.org) に連絡してください。
(英語でもフランス語でも通じます。名簿ページ上端のContactボタンからも同じアドレスにつながります。どうしてもわからない場合は事務局にお知らせください。)

国際学会事務局からの希望として、連絡などの便宜を図るため、メールアドレスを持っている会員は自分のメールアドレスを連絡してください。その際、メールアドレスの公開の是非、またメールアドレスを用いて連絡を受けるか否かは、個人の選択にまかされています。

シンポジウム、講演会や出版の告知などのためにも、国際18世紀学会のホームページを活用してください。

※ 新入会員の方は、なるべく自分で上記アドレスにアクセスして、ご自分のお名前を登録してください。詳しくは国際18世紀学会のサイトをご覧ください。(上記サイトの画面上部のISECS-directボタンから名簿にアクセスし、英語版でRegistration、フランス語版でInscriptionというボタンから登録ページにアクセスできます。)

投書欄について

この「学会ニュース」に投書をしていただくこともできます。たとえば以下のような内容の投書が可能です。

- ・学会や事務局への意見、提案、希望など。
- ・掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼(たとえば「『〇〇』という本を探しています」など)。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

なお、以前の「『百科全書』研究会」のように、チラシや案内文書を「学会ニュース」に同封することも可能です。年3回の発行なので緊急の案内には適しませんが、全会員にお届けできます。(経費等の都合上、枚数の少ないものに限りまします。)

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。(ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。)

当学会は学際的な学会であるため、会員の研究が広範囲に及び、担当幹事だけでは各分野の重要文献の情報を集めるのが困難です。書評で取り上げるに値すると思われる図書がある場合、事務局までお知らせください。(特にご自分の専門分野が当学会で十分に扱われていないというご不満をお持ちの方は積極的にご推薦ください。)

学会への献本

学会宛に以下の図書をいただきました。お礼申し上げます。

- ・笠谷和比古編 『一八世紀日本の文化状況と国際環境』思文閣出版、2011、vi+568+iv p. (版元より)
- ・塩谷清人 『ダニエル・デフォーの世界』世界思想社、2011、422+55 p. (版元より)

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、会員の皆さんからの希望も受け付けています。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。(編集の都合上、4月号は2月初め頃までに、9月号は7月半ばまでに、12月号は10月初めまでにご希望をお寄せください。)

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、『年報』末尾またはホームページの「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、会費未納の方には、その年数に応じた金額を印字した払い込み用紙を同封させていただいています。学会の活動は皆様の会費によって支えられています。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。

なお、口座番号は以下の通りです。

00950-2-178903 名義：日本18世紀学会

寄付のお願い

別紙要領をご覧ください。（昨年 of 寄付要領に記載されていた学会の口座番号に間違いがあったようです。大変失礼しました。今回お届けするのは訂正版です。）

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお、現在事務局からメールをお送りしてもお届けできない会員の方がいらっしゃいます。ご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。また、メールアドレスを変更された場合もお知らせください。

幹事会メンバー(50音順)：安西信一、伊東貴之(東アジア交流担当)、王寺賢太(国際幹事)、小田部胤久(国際学会執行委員)、川島慶子、斉藤涉、関谷一彦(年報担当)、武田将明、田邊玲子(年報担当)、寺田元一、長尾伸一(東アジア交流担当)、馬場朗、逸見龍生、堀田誠三、増田真(代表幹事)、

会計監査：玉田敦子 中島ひかる

日本18世紀学会ニュース 第68号 2011年12月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 増田 真

事務局 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 増田(仏文)研究室

e-mail: jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp

tel. / fax: 075-753-2766

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/>